



上越交響楽団 第58回定期演奏会

joetsu symphony orchestra / The 58th regular concert

■日時

2006年3月11日(土) ●開場18:00 / 開演18:30

■会場

リージョンプラザ上越 コンサートホール

■指揮

吉井俊哉

■客演コンサートマスター

三溝健一

■主催

上越交響楽団

Program & Explanation

●プログラム ●曲目解説

フランツ・フォン・スッペ 喜歌劇「軽騎兵」序曲

Franz von Suppé
Ouvverture "Leicht Kavallerie"

ガブリエル・フォーレ 組曲「ペレアスとメリザンド」 作品80

Gabriel Urbain Fauré
Pelléas et Mélisande Op.80

バルトーク・ベーラ ルーマニア民族舞曲 作品68

Bartók Béla Viktor János
Romanian folk dances, Sz68

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 交響曲第41番ハ長調 K.551「ジュピター」

Wolfgang Amadeus Mozart
Symphonie Nr.41 C-dur K.551 "Jupiter"

「軽騎兵」はウィーンのカール劇場の楽長だったスッペによる傑作オペレッタです。カール・コスタの台本によるハンガリーを舞台にした軍人生活を描いた2幕の劇に作曲されました。初演は1866年で当時オペレッタの全盛期だったウィーンでの初演は大変な好評を博しました。残念ながら現在では上演される機会はありませんが、序曲だけはたいへん有名で良く演奏されます。曲は主要な4つの旋律を集めたもので、ハンガリーの草原を踏破する軽騎兵隊の勇壮なギャロップ行進の描写が中心になった作品です。

モーリス・メーテルリンクの戯曲を英訳して上演するために、イギリスの女優パトリック・キャンベルからの依頼によって作曲されました。1898年にロンドンのプリンス・オブ・ウェールズ劇場で上演され、音楽はフォーレ自身の指揮によって初演されました。劇は王子ゴローが森の中で出会った神秘的な女性メリザンドと結婚するところから始まります。その後、ゴローの義弟ペレアスとメリザンドが愛し合うようになります。このことを知ったゴローは、2人の密会の場で弟を殺してしまいます。メリザンドはゴローを許しながらも、力尽きてペレアスのあとを追うようにして死んでいきます。この付随音楽は組曲として4曲構成で演奏されます。どの曲もシンプルで精妙な構成で書かれており、無駄のない響きを味わうことができます。

- 第1曲:「前奏曲」** …………… メリザンドの主題とよばれる静かで柔らかな主題が出てきた後、次第に情熱的になります。第2主題は悲劇を暗示しています。
- 第2曲:「糸を紡ぐ女」** ……… メリザンドが糸を紡ぐ場面の音楽で、終始弦楽器が鳴らす3連符は紡ぎ車を表しています。
- 第3曲:「シシリエンヌ」** ……… メリザンドが泉のそばでペレアスとふざけていてゴローから貰った指輪を泉に落としてしまうシーンに使われます。この組曲のみならず、フォーレの全作品の中でももっとも良く知られた曲です。単独で演奏されることもよくある大変人気の高い曲です。
- 第4曲:「メリザンドの死」** …… 喪に服しているような二重付点音符を含む重い足取りで始まり、次第に盛り上がりフォルテになります。メリザンドの死を予告する葬送の音楽により静かに曲は閉じられます。

ドイツ・オーストリア音楽の強い影響から出発したバルトークですが、ハンガリーやその周辺の民謡をはじめとした民族音楽を科学的に研究し、その語法を自分のものにする側面を持っていました。研究範囲は当時ハンガリー領であったトランシルバニアの山地ルーマニア地方も含まれていました。その成果の一つがこのルーマニア民族舞曲です。1914年にピアノ版として作曲され1917年に管弦楽版に編曲されました。トランシルバニア地方の音階は増4度音を持つのが特徴で、西欧音階にはない音をバルトークは独特のデリケートな和声感覚で処理しており、彼のユニークな才能が垣間見られます。舞曲は全7曲から構成されており連続して演奏されます。

- 第1曲:「棒を持った踊り」**
第2曲:「飾帯をつけた踊り」
第3曲:「足踏みの踊り」
第4曲:「角笛の踊り」
第5曲:「ルーマニア風ボルカ」
第6曲:「急速な踊り」
第7曲:「急速な踊り」

休 憩

1788年8月10日に完成したこの曲は、当初「終結フーガ付き交響曲」と呼ばれていましたが、ロンドンで流行した際に同時代のヨハン・ベーター・ザロモンがギリシャ神話の最高神である「ジュピター(ユピテル)」のニックネームを付けたと紹介されています。崇高で神々しいというだけでなく本作品のスケールの大きさ、輝かしく荘嚴な曲想、創造のエネルギーからして「ジュピター」はまさにふさわしい名前です。41番は39番、40番とあわせて「後期3大交響曲」と呼ばれることがあります。作曲時期も非常に近接しており39番、40番がロマン派的であるのに対して41番は非常に均整の取れた古典的な雰囲気を持っています。最終楽章のモチーフによるフーガはダンスしながら天使が舞い上がってゆくような美しさがあり、古典派の最高の到達点ともいえます。いずれにしても、2ヶ月ほどの間に性格の違う名作交響曲を一気に書いたことはモーツァルトの天才ぶりをととよく表わしています。なお、モーツァルトはこのモチーフをたいへん好んでおり交響曲第1番変ハ長調(K.16)ですでに聴かれるほか、第33番変ハ長調(K.319)やミサ曲ハ長調(K.257)などにも使われています。

- 第1楽章:アレグロ ピバーチェ ハ長調 4/4拍子 ソナタ形式**
第2楽章:アンダンテ カンタービレ ヘ長調 3/4拍子 ソナタ形式
第3楽章:メヌエット:アレグレット ハ長調 3/4拍子 複三部形式
第4楽章:アレグロ モルト ハ長調 2/2拍子 ソナタ形式